

棚田学会通信

第14号 2004年10月25日

発行/棚田学会

〒184-8577

東京都小金井市本町 6-5-3

(ふるさときゃらばん内)

TEL:042-381-6721

FAX:042-383-8614



目次

表紙の写真 静岡県松崎町石部の棚田	1
巻頭言	
棚田とグリーンツーリズム	静岡県松崎町長・深澤 進…2
各地の情報	
シンポジウム「棚田からアジアが見える」に参加して	信州大学助手・内川義行…2
アジアの棚田フォーラムに参加して	東京都調布市在住・高木宏明…3
合併がもたらしたNPO	新潟県安塚町助役・丸山 新…4
日本の棚田百選の紹介	
重太郎の棚田	長野県八坂村農林係長・中島喜一…5
会員通信	
棚田サミット10回目の参加の旅	神奈川県横浜市在住・木戸幸子…7
書籍紹介	
「歌集・棚田の人間」、「信州発・棚田考」、「梯田文化論」	中島峰広・小川直之…7
棚田学会事務局報告	
平成16年度棚田学会活動計画、予算について	8

[巻頭言]

棚田とグリーンツーリズム

静岡県賀茂郡松崎町長

深澤 進

伊豆半島西海岸の南部に位置する松崎町は、西は駿河湾を臨み、北・東・南の三方を天城山系に囲まれ、町内を流れる那賀川・岩科川の流域には約 500ha の耕地をもつ伊豆西海岸最大の平野を形成しています。

観光地として発展してきた松崎町も、国内旅行の不振や観光客のニーズの変化を受け、来訪者が伸び悩んでいることや農業や、漁業と兼業の小規模民宿の高齢化による後継者不足の問題から、従来型の観光ではなく町の恵まれた自然・文化・歴史・産業を活用した体験型の観光地にすべく、財団法人農林漁業体験協会の支援を受け、平成 6～7 年の 2 カ年をかけ「静岡県松崎町グリーンツーリズム整備構想策定事業支援活動報告書」を策定しました。

構想では、農林漁業を主軸とした地場産業、地域文化の活性化、人材育成、交流の機会の創造、地域情報の発信を目的として、都市住民と農山漁村の交流を通じた「全町まるごとふるさと」の松崎型グリーンツーリズムの推進が提案されました。

急峻で耕地の少ない石部地区では、戦中から戦後にかけて山の斜面に石を運び、石垣を造るなどして切り開いた棚田が広がり、郷土の

歴史遺産となっている。最盛期の昭和 30 年代には、1,000 枚、約 10ha もあったといわれているが、農業者の高齢化や労働の大変さから荒廃地化が目立つようになってきた。こうした中、町のグリーンツーリズムの機運の高まりとともに、地元住民を中心に荒廃した棚田を復元し、美しい景観を保全し後世に伝え、合わせて地盤沈下していた地域の活性化を図ろうと棚田保全の取り組みが始まったのです。

今まで見捨てられていた棚田がなぜ今になってよみがえったのか。棚田をただ生産の場としてとらえるのではなく、グリーンツーリズム、エコツーリズムの拠点として都市住民との交流を図るべく、地域住民が考えたからに他なりません。

平成 14 年度からは、「棚田オーナー制度」を取り入れて、石部区、民宿協会、女性会など地元組織が協力してオーナー等への農業体験指導、郷土料理の提供など活発な交流が生まれてきたのです。

石部の棚田は、全国でも「海に見える棚田」として知られ、駿河湾を臨み、遠くには富士山を望む絶好のロケーションとなっています。最近では、オーナーとの交流以外にも、スケッチや写真クラブなどのツアーやウォーキング大会なども棚田で行なわれ、棚田を核とした「グリーンツーリズム」は大きく伸びようとしています。

石部の棚田の取り組みは、平成 16 年度、第 5 回しずおか観光大賞を受賞しました。

[各地の情報]

シンポジウム「棚田から

アジアが見える」に参加して

～棚田学会の新たな展開に期待～

信州大学農学部助手

内川 義行

8 月 10 日、東京日本橋三越にて棚田学会総会・国際フォーラムの行われた前日、早稲田奉仕園小ホールでシンポジウム「棚田からアジアが見える」が開かれ、参加しました。13 時の開始に急ぎ地下鉄東西線早稲田駅を降りると、突然の豪雨。わずかな距離に傘をさしたものの、会場についた時にはズブヌレでした。それでも、受付で事務局・高橋さんの笑顔の挨拶、さらに会場がやや手狭と感じられる大勢の参加者、開演後は講演者の熱のこもった報告で徐々に雨にうたれたことも忘れませんでした。



報告の後、参加者の質問を受ける

多彩な講演者による多くの報告の中で、私が特に印象深く感じたのは、ベトナム国立農業科学技術院の Le Van Tiem 先生による「ベトナム北部のライステラス」と、京都大学東南アジア研究所の安藤和雄先生による「雲南紅河県哈尼(ハニ)族の棚田農業」の 2 つの海外事例報告でした。以下その内容と印象を中心に報告します。

Tiem 先生は、ベトナムの棚田が北ベトナム Fransipan 山脈北側の山岳地域に集中していること、またかつては優位だった焼畑や休閑耕作による陸稲が現在は他の商品畑作物や棚田稲作にかわり減少していること、さらに先生ご自身は侵食防止・休閑の解消・高生産性等から棚田稲作を高く評価され、食料自給面からもその増加が望ましいとお考えのこと、しかし現実には造成に多くの資金・労働が必要なのと他の畑作物との収益比較の結果、政府援助事業などもあるが棚田の増加はわずかなこと等、誠実な語り口で丁寧に話されました。

ベトナムでは、棚田はわずかに増加し耕作放棄といった状況はないとおもわれるものの、市場経済による高収益輸出作物目の選択や都市部への人口流出といった時代状況からは免れえないことを改めて教えられ、人々の生活や文化の持続の問題は、私達が過去あるいは現在抱えるものと同根であるとの思いをいたしました。

一方の安藤先生は冒頭に、棚田が注目を浴びるとき、棚田のみが切り取られて考えられることの危うさを指摘され、棚田が暮らしや農業体系を支えるものとして機能していること、その持続性のメカニズムを明らかにすることこそ棚田保全を考える上で重要なことを主張されました。具体的には、雲南省紅河甲寅郷 (Jaiyin Xiang) の人々が棚田 (梯田) での水稲栽培を基盤としつつも、その他に棚田を利用した漁労 (コイ養殖) や段畑 (梯地) でのトウモロコシ栽培等を行い農業生態系を作り出している例を示し、その食文化、さらには焼畑・棚田・段畑との関係や、農地保全と漁労の機能を兼備した棚田構造の知恵等々を熱く報告されました。そこでは先生が彼らから学ぼうとされるスタンスを強く感じさせられました。

また、内容豊富な報告は、時間の延長を求めなくなる興味深いものでした。棚田保全を考えるとき、日頃から棚田だけでなく、農村としてとらえることこそ重要と感じる自分としても大いに共感をえるものでした。

以上の報告を含め、今回のシンポジウムで強く感じたのは、棚田保全問題の根底には、ある種世界共通な歴史の流れに対し、もうひとつの視座が求められていること、またその創造の意思とそれを導き出す使命を私達が認識し活動することの重要性でありました。

冒頭、中島副学会長の挨拶にもありましたとおり、これまで学会総会は 1 日の日程で、学術シンポジウムの企画は今回が初めてということでしたが、これは大変大きな進展と

感じました。地道な研究の蓄積と社会への還元こそがいつか大きな力の礎になると信じます。

会場を出ると先程突然雨を降らせた雲は既になく、晴れやかな思いで駅へ向かいました。

アジアの棚田フォーラムに参加して 東京都調布市在住



アジア各国の報道に来場者から拍手が起こる

今年の夏は (04 年) アテネオリンピック、酷暑、相つぐ大型台風と水害で忘れられない年となるが、「棚田ファン」にとっても「アジアの棚田フォーラム」「佐賀相知での第 10 回棚田サミット」など「国際コメ年」にふさわしい大型イベントがあり、嬉しい忙しさとなった。

数年前、フィリピン戦跡をたどる慰霊団の方々にくっついてイフガオの棚田群を見る機会があったが、その「偉業」に打ちのめされるような感動を得た。中国を祖国とする「稲」の 2,000~5,000 年に亘るアジア諸国への伝播の歴史に思いをはせ、いつかは「稲作」の子孫達が一堂に会する「サミット」が開かれる事を願望したが (本誌 7 号 02 年 6 月 15 日号) こんなに早く「第一回アジア棚田フォーラム」が開けた事は夢のようだ。

三越の「アジアの原風景・棚田体験展」も永田さんや青柳さんの豪華なパノラマ写真や「田んぼの神々」のディスプレイ、更に島根の「石見神楽」、佐渡の「文弥人形」、ふるさときゃらばんのミュージカル「田んぼは地球を救う」など、真に「生」の迫力を存分に伝えてくれ、家族や友人も誘い 3 度も行ったが、ふだんマンガ漬けの孫達も息をのんで見守っていた。

8 月 10 日の早稲田奉仕園でのシンポジウム「棚田からアジアが見える」にも参加できたので予備知識はかなり高まった。ベトナムのルー・バン・ティエム教授の「ベトナム北部のライステラス」、京都大、安藤和雄氏の

「雲南紅河県哈尼族の棚田農業」は共に生活感のこもった講義であった。

一般に、日本は「少子高齢化」「後継者不足」「円高と外圧」「輸入食の攻勢」、正気の沙汰ではない「自給率の低下」「一人当たり米消費 60kg/年割れ」など「減反」「放棄」への悪連鎖となるハンディキャップにこと欠かない。アジアの諸国は「発展途上」「人口爆発」「食糧不足」「米もフル生産」と単純に考えていたが、そんな簡単でないことも次第に理解できた。

各国の代表が力説し、納得できる共通点は幾つもあった。

いわく、棚田営農の為の①森林、水資源の重要性②水資源確保の為の共同ワークシステム（放出型表作には必要ない）それが、③自然、精霊や神仏などへの畏敬となり、祭り、信仰行事につながる。結果として、④食糧確保の他に、⑤動植物の生態系保持や、環境、国土の保全となり、やがて人間に感動を伝える、⑥美的景観資源となり観光ツーリズムに結びつけてゆく。

しかるに棚田はその非生産性、重労働の上、それだけでは生業として成り立たないため、多くの副業が必要だ。悪い例はケシの栽培や焼畑との共存。出稼ぎや、鴨や鯉、鮭などの養殖なども必要となる。アジアの山岳地帯といえども、グローバリズム、IT社会化、効率主義が侵透しはじめ、若者の不人気、離村、人手不足といった共通の悩みをいただくようになってくる。

観光資源としてドル稼ぎにもなるユネスコ「世界遺産」認定が待たれる中国・雲南省、ベトナム北部に対して、既に登録済のフィリピン・バナウエの経験はそんな甘いことばかりでない事を示唆する。農民側からすれば、レジャー施設ばかりに投資され、農村資源はないがしろにされ、電気もつかず、稼ぐのはマニラの観光業者で、地元住民は観光客の好奇心をあおるものとして撮影の対象になり、神聖な宗教的祈りや踊りも単なる「ショー」となり、おみやげの木工細工に樹々は切られ、子弟達はウェイター、ポーターなどとなり、ライフスタイルの崩壊につながるというものの。

移り気の観光客や、わがままな写真家には我々も思い当たることが多く身につまされる話でもあった。

いずれも 1000~1300 年の耕作歴史をもち、急峻な地形に 300 万~1000 万 ha の面積などといわれると、日本の総耕地面積より広いわけで圧倒されてしまう。

東大の春山先生が初日の基調講演で「東南

アジアの山岳地域には民族を超えた生活圏があり、これらの地域では、厳しい自然環境を克服する手法と格闘した上で、土地資源、水資源を活かした営農の姿がある」と言われていた。中近東でもベドウィンなどの遊牧民族は、今でも国境などという人為的政治的なつくりものは全く無視し、自由に移動しており、彼らにとってイスラエルもパレスチナもない。地球と人類の本源的な生の営みに於いては、そんなものは一時的な現象なのだろう。

ともかく、初めて、日本、中国、ベトナム、フィリピンの棚田を営む人達が一堂に会した。今後、更に語り合うべき、生活スタイル、農耕技術、流通消費の形があるはずで、今後の更なる交流が待たれる。言葉の壁にもどかしいこともあったが、ふるさときゃらぼんの寺本氏の軽妙洒脱、時には高圧無礼な名司会ぶりが 3 時間を超える大フォーラムをなごやかなものとし、成功であったと思う。

こういう機会をつくってくれたふるさときゃらぼんの石塚さん、ひらつかさんやスタッフの方々、CACCEPI の相川さん、麗澤大学や、湘南日中友好協会の方々、そして各国代表の渡航を可能にする為に浄財を捻出してくれた多くの企業の方々には敬意と感謝の気持ちでいっぱいです。

合併がもたらした NPO

新潟県安塚町助役

丸山 新



NPO 雪のふるさと安塚設立総会で

挨拶する準備委員長の池田さん

今、全国の市町村では、合併という大きな波が打ち寄せている。

編入合併する町村、対等に合併する市町村、独自路線をいく市町村などさまざまであるが大きな波に呑み込まれまいと懸命である。

我が町もあと数ヶ月で 14 の市町村と 1 つになり、21 万人の海あり、平野あり、山里ありの素晴らしい市が誕生しようとしている。

これまでの間、幾多の課題や問題を議論しながら調整し、夢を描き目標を設定し、来年 1 月 1 日に合併するのだ。一人ひとりが

どんな華を咲せるのだろうか。

近年国の税収が落ち込むなかで市町村行政は地方交付税、補助金、地方債など安定的な財源によって運営されてきた。このようななかで独自の発想と特色のある地域づくりにと懸命に努力し現在の基盤を築いてきたのである。しかし、現状はどうだろうか。毎年削減される財源、地方は生き残りをかけて知恵をしぼり頭をひねり、やっちはいるが住民サービスにはおのずと限界がきている。

経済界においてもこの不況といわれる厳しい環境下で、資本提携や業務提携、合併、リストラなどにより生き残りをかけて経営安定にしをぎを削り、暮らしにおいても余裕はなく、まったく先の見えない昨今である。

行政も合理化、効率化、財政の健全化をはかり足腰の強い広域的なまちづくりをしようとして国をあげて市町村合併が推進されている。正に新しい時代の市町村経営の到来である。

しかし、合併特例法が整備される前に市町村の自治を尊重した小さくてもきらりと光る自主の道を選択できなかったのか、広域事業をなぜ拡大できなかったのか考えさせられる。ヨーロッパでは人口500人くらいでも町や村の自治を尊重し共通事業の広域化を進め住民サービスを充実させている。日本においても広域行政（広域市町村圏の共通事業の推進）のあり方をもっと議論してほしい。

今回の合併は、広域行政の論をまたずにしなければならぬ状況に追いやられてしまったといっても過言ではなく、言い方は悪いが国は税収不足を合併という口実による大義名分をたて、それぞれの市町村に委ねてしまった。「金があったら」と財政力の弱い市町村にとってやりきれない思いは、どうしても拭い去ることはできない。国も行革をさらに進め将来展望を見据えた国策を定め、安定財源の確保に極力務めてほしい。全国の合併市町村の枠組みをみると、いくつもの市町村が合併する広域的なものから小規模の合併までさまざまだが、合併で一番重要なことは、大きな器と組織力で今まで取り組めなかった地域づくりや住民サービスをさらに向上させることができるかである。現状は非常に厳しいとは思いますが人（人材）、もの（資源、施設）、情報（ネットワーク）、財源などを有効に活用して合併効果を大いに発揮したいものである。

住民は今以上のサービスは求めなくても、より質の高いきめ細かいサービスを求めている。

しかし、現実には平均点にならざるを得ない今回の合併、どうすれば今まで培ってきた個性ある地域づくりを継続し伸ばしてやっていくことができるのだろうか。

それは、行政主導のまちづくりから行政にすべてたよらず活動できる組織、つまり自分たちの地域を自分たちの手でデザインし、行政と協働しながら活動する住民組織がますます重要である。

当町においては本年4月に全集落を地縁団体に認定し、12月までにいくつかの地縁団体（自治会）を町内会に再編することにし、すでに動き出した町内会もある。もっか振興計画を立案中で新しい住民活動が芽生えはじめてきている。

このように、それぞれの集落が変わってくると、地域も変わり（自立）、地域が変わると町全体も変わざるを得なくなる。

町が変わることとはどういうことか、町に代わって活動できる組織はどういうものがあるか、合併という大きな波にうまく乗るにはどうすればよいか、自立とは何かなど合併が近づくにつれより鮮明になってきたのである。あらゆる角度から何日も何日も住民が議論しあった結果1つの方向が示された。それは、自分たちの力で航海できる船を創り自分たちで航海する、コミュニティ活動を重視した全町民総参加の「NPO」が選択されたのである。8月29日設立総会が開催され「NPO 雪のふるさと安塚」が誕生（全戸加入率80%）し県の許可を待っている。

このNPOは今まで、行政主導といわれながらも町と地域が協働して進めてきたまちづくりを継承し、さらに住民が肩をはずらず自由に楽しくイベントや趣味、ボランティア、スポーツ、子育て、環境、農業、田舎体験などいろいろな活動ができる組織を目指している。

この合併がもたらした新たな活動は本音で語り合い、住民一人ひとりが幸せ感が感じられる活動であってほしい。

【日本の棚田百選】

「重太郎の棚田」

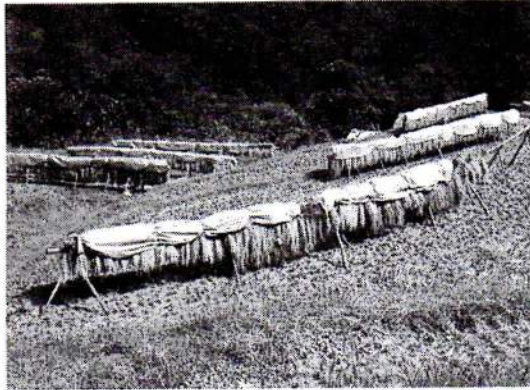
棚田の復活と保全

長野県八坂村農林係長

中島 喜一

長野県八坂村と聞いても分からない人が多いと思う。実は昭和51年に全国で初めての試みとされる、都市の小中学生が1年間を単位として村に移住し、農家の里親などのも

とで暮らし、自然と地域に親しみ農業など（棚田では田耕しから収穫まで行う。）の体験活動を行いながら、村の小中学校に通学する「山村留学制度」発祥の地で、都市の父母との家族ぐるみの交流が進むなど、現在までに20年余が経過し約800人の子供達が巣立っている村である。



八坂村梨の木の棚田

八坂村の位置は、長野県の西部、北アルプス東山麓で総面積は33.94km²。標高は東部の犀川流域の440mから西に向かって高くなり大町市境の鷹狩山の1164mにまで及び標高差は724mある。

地層は第三紀層で、山谷が複雑に入り組み起伏が激しい山地特有の地形に、数戸から30戸程度の小集落が点在し、農地も各集落の周辺に小面積の農地が点在しているが、その大部分が地すべり指定地である。

八坂村は兼業農家を中心に農業従事者の高齢化が進み、後継者の確保が最大の課題となる中で、ほ場を中心とする生産基盤の整備を実施し、労力の省力化と管理の効率化を進めるために、平成9年度から平成13年度にかけて中山間総合整備事業により、24.5haの基盤整備を等高線に沿った棚田で進め、村内の整備面積は29.5ha、整備率は75%になった。

村内の水田は基盤整備を進めてきたが、急傾斜地に点在するため、75%が中山間地域直接支払制度の対象水田、棚田である。

棚田百選に選ばれている「重太郎の棚田」は、「中村」、「馬落し」、「生婦平」、「梨の木」の4つの地区を総じて言われている。総面積は5.7ha、平均勾配25度と村内でも一番の急傾斜地区で、この地区には水田耕作に必要な水源がなく、4地区とも山腹を長い距離を導水し、先人達が協力し合い開田を進めてきた。

なかでも、「馬落し」地区は第2次世界大戦末期の食糧増産が要請された時、平均勾配25度の日当たりの良いこの地に「勝野重太郎」という篤農家が開田を計画、自ら先達と

なり資材を投じ、地形を測り約1km程離れた谷沢に堰を設け、山腹に木樋を渡し水路を開削し、己を顧みず困難な事業を村人を結束させ約1.6ha程の開田を完成させた。

この地区全体を「重太郎地籍」と、あるいは水路を「重太郎水路」と呼称されている由縁はここにある。

山腹を導水してきた水路は、漏水が多く地区の人々は永年水不足に悩まされてきたが、「中村」、「馬落し」、「生婦平」の3地区は基盤整備に併せ水路整備が行われた。

梨の木地区は全体で約1.5ha程で平均勾配25度、水田面積は50m²前後から200m²前後の水田が多く、機械化はできない、水が少ないなどから耕作放棄水田が増加、年月が経つにつれ草木が覆い茂るなど地域活力の低下と洪水防止機能の低下が大変危惧されていた。

村では、過疎対策として公営住宅の建設、あるいは離村した農家の空き家の有効利用等により若者の定住促進策等を進めるなかで、昭和60年頃転入してきた若者が、「農村にきたのだから自分の食べる米くらいは作りたい」と、「梨の木地区」の耕作放棄地なら借りられるだろうと目を付けて耕作し始めたのがきっかけで約20年近くなる。

今日のように誰しも棚田などと言わない時期に実はもう棚田の復活は始まっていたのだ。

地元では、地元の人達がいやで止めた所へ来てよく作るな、変わり者だなと見ていた向きもあるようだが、この新しい人達の「自分の食べる米を作りたい。」行動が今日の棚田復活につながったのだ。

その後地区内に「棚田を大切にする会」が組織され棚田の復活は一段と進み、八坂小学校5年生のふるさと学習による水田耕作（紫米も作っている。）、八坂村保育園の自然体験遊びの場所としての活用も含め、地区の上下2/3が復活している。

「梨の木地区」は地権者が耕作していなかったためなのか定かではないが、今回の基盤整備は行われずに、水源から約1kmをパイプなどによる水路補修を村からの原材料支給を受けて大切にする会のメンバーが敷設整備し、それなりの水量が確保されてきた。

水量は確保されたので残り中間部分1/3の草木が茂っている箇所は復活作業だ。村の農業委員会では棚田を大切にする会と復活作業計画を進め、この秋に多くの方々に1日汗をかいて協力してもらう日の計画を進めている。さて、汗かき協力隊はどの位集まるだろうか。

貴重な環境資源である棚田の今回のような復活・保全活動には、中山間地域直接支払制度が大きな後押しになっているとともに、この制度が、農村でも近年失われかけていた「互助」の精神の起爆剤になっている。

棚田サミット 10 回目の参加の旅

横浜市在住

木戸 幸子

第 10 回全国棚田サミットは、佐賀県相知町で 9 月 3、4 日開催されました。相知町蕨野の棚田は見事な石積み棚田で、八幡岳の中腹（標高 420m）あたりから集落のある 180 m 付近までの間に 40ha、1050 枚が拓かれ用排水のための暗渠も立派な巨石で積み上げられていました。

蕨野と言えば、何と言っても日本一の高さを誇る 8.5m の石積の棚田ですが、一見したところどれが 8.5m？と思うほどに周りも皆すごい石積でした。この田は「三反の田」と呼ばれて昭和元年から 10 年間かけて築かれたもので、労力は農家が農閑期に朝 8 時から夕刻 5 時迄、男 7 女 5 の割合で労働し、休憩は 12 時に 15 分、10 時と 15 時に 30 分間とり、食事は 10 時と 15 時の 2 回、弁当は妻ごはんを食べおかずは現場でイワシを焼くなど質素なもの、と資料に記されていました。

佐賀県ではこの共同作業を「手間講」と呼んでいます。手間講が盛んに行われていた時代は地域の結びつきも密接だったそうです。今回でサミット参加は 10 回目になりますが、その地域の環境の中から生まれた石積みや土坡（どは）の立派な棚田を目の前にして誇張ではなく身震いを覚えることが何度もありました。

何百年もの間、世代を継いで拓き続けられた力の源は何だったのでしょうか。圧政に苦しんだ世代もあったでしょうが、その中でも子供達に孫達に一粒でも多くの糧をと願う気持ちが力となったのでしょうか。サミットはそんなところに思いを馳せる場にもなっています。「村は高齢化と後継者不足であと 10 年」「時代は変わった」とあっさり言われる現実がありますが、でもこの 10 年棚田の周辺にはスポットライトがあたり大きく動き出したと思います。

相知町会場にも各地の農家や棚田保存会の方々が交流会や各分科会に大勢参加されていました。更に新しい動きが起きる予感がしています。

開催日前日の 9 月 2 日は棚田百選に入っている玄海町浜野浦、肥前町大浦、福島町土谷を超豪華なガイドさん中島峰広先生と高

野光世さんとで回りました。初めて訪れた所だったので、とても懐かしく思えたのは写真集でたびたび見ていたからでしょうか。玄界灘に向かってトントンと吸い込まれるように落ちて行く棚田の風景は山国育ち（新潟県松代町）の私にはとても新鮮でした。玄界灘エリアの棚田は炭砒の拡大と密接な関係があり、ボタ山が増えると田んぼが増える、そして地形的に棚田が増えて行く、その過程が見えるようでした。

その日の宿は福島町土谷棚田の末吉さんのお宅にお世話になりました。有名な土谷棚田の火祭りを立ち上げられた永田さんも加わり、同級生のお二人がジュースの空き缶を松明に仕立てて棚田を夜の闇に浮かび上がらせたご苦労話を面白おかしく、おいしいごちそうと一緒にたっぷり聞かせて頂きました。各地で棚田の景観を軸に地域起こしが始まっていることも実感できました。

そして開催地の相知町でも心憎い演出がありました。八幡岳の裾野に広がる石垣群を背景にギターとオカリナの生演奏があり、美しい音色は涼風を誘ってくれました。

サミット終了後は千賀裕太郎先生と他お二人も加わられて、別府市内成棚田へ向かいました。内成をもり立てたいと考えておられる別府市の後藤さんと中野さんは「中島、千賀両先生がお越しになられるのなら地元と外部の方々との初めての交流をやりたい」と企画され、参加しました。名物のだんご汁を囲んで和やかなひと時でした。

翌日は棚田を歩き、地元テレビが回る中、案内された高台からの一望はしばらく瞬きも忘れてしまいました。古い歴史や仏教文化に裏打ちされたこの地区は、たくさんの可能性を秘めている所だと思いました。

棚田サミット 10 回目の旅もまた各地域で張り切っておられる大勢の方々にお会い出来ました。これからも「うちの棚田は日本一」と自慢話のてんこ盛りを楽しみに旅を続けたいと思っています。

書籍紹介

『歌集・棚田と人間』神田三亀男著

広島地域文化研究会 2004 年 9 月

著者は、広島県の職員として活躍されたが、広島宮本常一といわれる民俗学者、農村歌人としても知られている。これまで刊行された歌集『棚田』、『棚田残照』、『棚田荒涼』に続く第四作目。これが完結の書とされる。自らが「聞き詠み歌」といわれるように、棚田地域を訪ね、作業する人の心情が表現できるまで徹底した聞き取りを行い歌が作られている。作品は、過疎化し、高齢化した山村で耕作放棄されていく

棚田をとらえ、「足腰の痛みに耐えての田ごしらえ唄(おうな)はひとり棚田に入れり」、「亡びゆく農と先祖の墓守りを一人の唄にまかされている」など唄が働く姿を読んだものが多い。棚田地域の現状を活写し、棚田挽歌の歌集ともいえる。(中島峰広)

『信州発 棚田考-中山間地域の新たな動き-』

木村和弘著 ほおずき書籍 2004年9月
著者は、信州大学農学部教授、傾斜地水田における圃場整備研究の第一人者。本書は伊那毎日新聞に連載されたコラム『よみがえれ! 農業・農村』をまとめたもの。農村に住み、農村をよく知る農業土木・農村計画の研究者の視点から、本人自身が怒りとも表現している滾る思いで難問を抱える中山間地域の農業や農村が論じられている。「景観よりまえに作業し易さを考えるべきである」、「農村の景観の美しさは畦畔の草刈りによってもたらされている」、「長野県栄村の田直し方式は一般化できる手法ではない」など都会に住む研究者がはっとするような主張がちりばめられている書である。(中島峰広)

『梯田文化論-哈尼族の生態農業-』王清華著
雲南大学出版社刊 1999年5月
中国の梯田(棚田)は雲南省や貴州省など

に広く見ることができ、それは山麓一帯に拓かれた壮大なものである。王清華氏の著作は、雲南省南西部の哀牢(アイロウ)山脈に広がる哈尼族の村々における農耕文化を論じたもので、梯田を視点として民族文化を検証している。本書は、全10章と付録1・2から構成される397頁の大冊で、本格的な梯田文化論である。その文化論は、梯田の地理や耕作方法を明らかにするというのではなく、梯田耕作を生産活動の中心にする人々の生活様式、社会構成、祭祀、儀礼などについて、その実態を明らかにするとともに特質を論じているところに特色がある。こうした内容から本書は、哀牢山脈の哈尼族に関する、梯田を視点とする民族誌であるといえる。民族文化文庫の文化史論叢の一冊として刊行されたもので、定価は中国元で28元。(小川直之)

棚田学会談話会

棚田の石垣をどう考えるか

講師：印南敏秀(愛知大学教授)

日時 12月11日(土) 15:00~

場所 表参道 新潟館 ネスパス 3階

参加費 無料(一般の方は資料代500円)

問い合わせ：棚田学会事務局：高橋

TEL：042-381-6721

事務局報告

平成16年度棚田学会総会(平成16年8月11日開催)にて、下記の通り、本年度活動報告及び予算が決定いたしましたのでご報告申し上げます。

平成16年度活動計画

1. 棚田学会大会(平成16年度大会：平成16年8月10、11日開催) 1回
2. 理事会(平成16年7月24日開催済み、臨時開催を含む) 8回
3. 研究会・談話会・見学会 5回
4. 棚田学会誌『日本の原風景・棚田』(第6号) 1回
(棚田学会誌第5号：平成16年7月31日発行済み)
5. 棚田学会通信(第14、15、16号) 3回

平成16年度予算

(平成16年7月1日~平成17年6月30日)

事 項	予算額	事 項	予算額
会費収入	1,920,000	旅費	200,000
普通会員400名×4,000円	1,600,000	講師旅費(研究会等)	100,000
学生会員10名×2,000円	20,000	連絡旅費(現地見学会等)	100,000
賛助会員30名×10,000円	300,000	謝金	160,000
図書販売	100,000	編集謝金	60,000
前年度繰越金	1,849,107	アルバイト謝金	100,000
		印刷費	1,350,000
		会誌第5号(B5、106頁)	1,100,000
		学会通信50,000円×3回	150,000
		大会資料等	100,000
		通信・郵送費	600,000
		会誌発送費(第5号)	160,000
		学会通信発送費(14・15・16号)	250,000
		郵送費	40,000
		通信費(電話、FAX、切手等)	150,000
		ホームページ運行費	45,000
		会議費	200,000
		理事会・編集会議他	200,000
		大会会場設営費	80,000
		消耗品費	34,107
		予備費	1,200,000
合 計	3,869,107	合 計	3,869,107